

## 栄養教諭の食に関する指導上の課題と改善方策の検討

Examination of Issues in Food and Nutrition Education and  
Improvement Measures for Nutrition Teachers新井英志<sup>1)</sup>、村田尋如<sup>2)</sup>

Hideshi ARAI , Hiroyuki MURATA

本稿では、栄養教諭が考えている食に関する指導上の課題について、3つの研究課題を設定して検証した。研究対象は、2019年度に北海道の小・中学校に勤務する栄養教諭394名であり、郵送法により質問紙調査に回答した58名が調査対象となった（回答率は14.7%）。研究方法は、アンケート調査の結果について、クロス集計や多重比較で統計解析した。また、栄養教諭が考える課題の解決策と「総合的な学習の時間」における食に関する指導の展開例の検討は、文部科学省、農林水産省、北海道教育委員会の資料を活用して考察した。1つ目の課題である「栄養教諭の「食に関する指導に関わる事項の自己評価」と、「多様な業務を背景とした時間不足が主たる要因となって、指導における内容や技術・方法についての課題がある」の関係性はどの程度あるか。」であるが、両者の明確な関係性は見出せなかったが、時間不足が要因となって、6割の栄養教諭が「食に関する指導時間の確保」に苦労していることが分かった。2つ目の課題である「多様な業務や時間不足が主たる要因となった、食に関する指導における「指導内容」や「指導技術・方法」の課題についての解決策は何か」であるが、まず、多様性について考察し、栄養教諭の職務上、今後ますます多様性が重要となることが分かった。また、多忙化（時間不足）については、現在、文部科学省を中心として「長時間勤務」の解消について検討されており、その解消について今後に期待したいと考えた。そして、「指導内容」や「指導技術・方法」についての実践力を向上させるための「研修」の充実については、北海道教育委員会の資料を中心に考察した。3つ目の課題である「栄養教諭に必要な資質・能力を高める教職課程の「総合的な学習の時間」指導論」における授業改善の視点は何か」であるが、栄養教諭の課題解決の視点を含めた改善例を提案した。

1) 天使大学 看護栄養学部 教養教育科

(2021年7月28日受稿、2021年12月13日審査終了受理)

2) 天使大学 看護栄養学部 非常勤講師

In this study, a survey with three major research themes was conducted to collect ideas and opinions of nutrition teachers about issues in food and nutrition education. The research target comprised of 394 nutrition teachers employed at elementary or middle schools in Hokkaido during 2019. Fifty-eight teachers responded to a paper version of the survey administered by mail (a reply percentage of 14.7%). The data were analyzed using statistical procedures including cross-tabulation and multiple comparisons. Additionally, solutions to problems reported by nutrition teachers as well as examples of strategies for food and nutrition education to use in “Comprehensive Learning Time” activities were generated with reference to guidelines from sources such as the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries, and the Hokkaido Prefectural Board of Education.

Responses to the first research question (“To what degree are your responses to Self-evaluation for items relating to food and nutrition education and The main cause of issues relating to the content, techniques, and methods used in instruction is the lack of time caused by performing of a variety of other duties related to any problems you experience?”) did not reveal a clear association between these two areas. Yet 60% of nutrition teachers had difficulty managing sufficient time to prepare lessons for food and nutrition education.

Replies to the second research question (“For problems relating to the contents, techniques, and methods used in food and nutrition education that are caused by lack of time and performing a variety of other duties, how can these issues be resolved?”) revealed that it will be increasingly important to consider the variety and number of duties performed by nutrition teachers.

In addition, with regard to the issue of overwork (lack of time), we hope that the current research being conducted by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology on long working hours will generate solutions. Furthermore, methods to train nutrition teachers in order to improve quality of contents, techniques, and methods used in instruction were examined with reference to guidelines from the Hokkaido Prefectural Board of Education.

Based on replies to the third research question (“What strategies could be implemented in the Teaching Methods for Comprehensive Learning Time used in teacher-training courses to support nutrition teachers’ development of high levels of skill and ability?”), we proposed an example to improve the content of such courses that incorporates solutions suggested by nutrition teachers.

#### キーワード

食に関する指導 : Food and Nutrition Education

食育 : Food Education

栄養教諭 : Nutrition Teacher

課題と改善方策 : Issues and Improvement Measures

総合的な学習の時間 : Comprehensive Learning Time

## I. はじめに

栄養教諭制度の創設により2005年4月から栄養教諭が配置されて15年が経過したが、食に関する指導を取り巻く環境は、近年、刻々と変化している。近年の動向としては、2017年に告示された小・中学校の学習指導要領<sup>1),2)</sup>は、2020年度から小学校で全面実施されるとともに、2021年度からは中学校で全面実施された。また、学習指導要領の改訂に併せて、「食に関する指導の手引―第2次改訂版―」<sup>3)</sup>が2019年8月に文部科学省から発刊された。さらに、文部科学省は、2021年1月に中央教育審議会の答申である「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」<sup>4)</sup>を公表した。加えて、農林水産省は、2021～2025年度までの「第4次食育推進基本計画」<sup>5)</sup>を2021年3月に公表するとともに、2021年5月には「令和2年度 食育白書」<sup>6)</sup>を公表した。

筆者らは、これまでに、2019年11・12月に実施した、北海道の小・中学校に勤務する栄養教諭対象のアンケート調査結果を踏まえた研究を進めてきた。このアンケート調査の主目的は、「総合的な学習の時間」における栄養教諭の食に関する指導の現状と課題を明らかにし、改善策を検討することであった<sup>7)</sup>。前々報(2020)<sup>7)</sup>においては、栄養教諭が行う食に関する指導のうち、「総合的な学習の時間」の授業時数は、「特別活動(学級活動)」の約1/7であることや、「総合的な学習の時間」で行われる授業内容は、「総合的な学習の時間」の趣旨を十分踏まえている実践が多くなかったことを明かにした。また、前報(2021)<sup>8)</sup>においては、栄養教諭が考えている食に関する指導上の課題について、栄養教諭は、多様な業務を背景とした時間不足が主たる要因となっており、指導における内容や技術・方法についての課題が最も大きいと考えていることを明かにした。

当然のことながら、筆者が勤務し栄養教諭を養

成するT大学においても、学校現場の課題に的確に対応できる実践的な指導力を持つ資質・能力の高い教員の養成が一層求められている。

これらのことから、本研究では、栄養教諭が考えている食に関する指導の現状と課題について、3つの研究課題を設定し、アンケート調査の結果や近年の動向を活用しながら、その改善策を考察するとともに、栄養教諭養成課程における「総合的な学習の時間」指導論の具体的な指導展開例を提案することとした。

本稿は、Iと次を含め8つの部分からなる。

II. 先行研究 III. 研究課題 IV. 研究方法 V. 実態調査の結果 VI. 考察 VII. まとめ VIII. 今後の課題

## II. 先行研究

先行研究について、国立情報学研究所のCiNii Articlesで確認した(2021年6月30日現在)。「総合的な学習の時間」の単語を含む研究論文は5258件と多かったが、「総合的な学習の時間」「栄養教諭」では、19件と激減した。また、「栄養教諭」「食育」では、937件だったが、「栄養教諭」「食に関する指導」では89件と1/10以下に減少した。さらに、「食に関する指導」「課題」では56件となり、これに「栄養教諭」を加えるとさらに減少し32件となった。

加えて、「食に関する指導」「課題」「栄養教諭」「実態調査」では4件であった。このように、「栄養教諭」「食に関する指導」と、その「課題」や「実態」あるいは「実態調査」に関する研究論文が極めて少ないことが分かった。

「総合的な学習の時間」「栄養教諭」に関する論文としては、坂本ら(2013)<sup>9)</sup>が、担任教諭が主体となる社会科および「総合的な学習の時間」における食に関する指導の実施可能性と学習成果の検討を行った。給食を残さず食べる行動形成をめざしての指導であったが、栄養教諭配置校において、本研究の授業は実施可能であることと、その

成果があったことを報告した。井元（2017）<sup>10)</sup>は、「国連の持続可能な開発目標（SDGs）をテーマにした授業」を、「総合的な学習の時間」において家庭科教諭と栄養教諭が協同授業で行うことを提案した。浅沼ら（2021）<sup>11)</sup>は、栄養教諭が、岩手県の特産物である秋サケを取り上げた教材「秋サケ丸ごと探検ノート」を用いて、「総合的な学習の時間」における食に関する指導の実践結果を検証した。

「食に関する指導」「課題」「栄養教諭」に関する論文としては、中尾ら（2009）<sup>12)</sup>が、広島県の小学校における食に関する指導の実態について家庭科指導に着目して報告した。食に関する指導の課題について自由記述で問い、KJ法を行った結果、26項目が抽出された。上位には、食育の授業を組み込む余裕がない、教材研究、準備の余裕がないといった「時間の確保」と、様々な家庭環境や子どもの状況から「子どもの食生活の多様性への配慮」が挙げられた。篠原（2012）<sup>13)</sup>は、宮崎県内の小・中学校における食育の実態調査を行い、小学生、中学生の味覚の変化として「濃い味を好む」、「柔らかいものを好む」などの問題が顕在化しており、今後、我が国の食文化を生かした「咀嚼教育」や「味覚教育」の構築が望まれることを明らかにした。丹野（2015）<sup>14)</sup>は、宮城県内の小学校と中学校に勤務する栄養教諭・学校栄養職員の勤務実態を把握するとともに、個別指導に対する意識調査を行い、個別指導が47.6%であったことを報告した。磯部ら（2017）<sup>15)</sup>は、毎日繰り返し行われる「給食の時間」での指導の実態調査を行い、その時間における一番の課題は偏食に関する指導であることを明らかにした。向坂ら（2019）<sup>16)</sup>は、福岡県の保育所、小学校、中学校の保護者を対象に調べた行事食・儀礼食・伝統食に関する調査結果をもとに、子育て世代の保護者が伝統的な食文化をどのようにとらえ、各家庭で実践しているのかを検証した。また、この結果をもとに、幼児期をはじめとした初等中等教育での食育指導の

可能性と課題を検討した。

このように、食に関する指導上の課題は多様化しており、これらの課題を解決するための具体的な方策を検討することは必要不可欠となっている。

以上のことから、食に関する指導において、栄養教諭自身が考える「指導内容」や「指導技術・方法」などの課題について、その解決方策の検討や考察が十分とは言えない現状にあることも分かった。

そのため、近年の食に関する指導を取り巻く環境が刻々と変化している中で、栄養教諭の実態を踏まえた「食に関する指導」の改善に資する研究の重要性は一層高まっていると考えた。

### Ⅲ. 研究課題

前々報（2020）<sup>7)</sup>や前報（2021）<sup>8)</sup>で報告した栄養教諭に係る「多様な業務」や「時間不足」の現状や課題、大学における授業改善の課題を踏まえ、次の3点を本研究における研究課題として設定した。

1. 栄養教諭の「食に関する指導に関わる事項の自己評価」と、「多様な業務を背景とした時間不足が主たる要因となって、指導における内容や技術・方法についての課題がある」の関係性はどの程度あるか。
2. 多様な業務や時間不足が主たる要因となった、食に関する指導における「指導内容」や「指導技術・方法」の課題についての解決策は何か。
3. 栄養教諭に必要な資質・能力を高める教職課程の「総合的な学習の時間」指導論における授業改善の視点は何か。

### Ⅳ. 研究方法

#### 1. 調査対象

調査対象は、2019年度の「北海道教育関係職員録」<sup>17)</sup>に掲載された北海道内の小・中学校で勤務する栄養教諭394名として、郵送法による質問紙調査を行った。調査時期は2019年11・12月であつ



た。所属長である校長の承諾書並びに研究参加に同意して同意書と質問紙用紙を返送してくれた58名が分析対象となった（回答率は14.7%）。

## 2. 調査方法

研究参加に同意した58名の栄養教諭の「アンケート調査票」の内容を分析して検証した。この調査票は、質問紙調査で記述を中心にして該当事項の選択も併用し、A4判裏表1枚とした。調査票の内容は2つの大項目である「Ⅰ 勤務校の状況等」（小項目を5項目含む）、「Ⅱ 食に関する指導の実践状況など」（小項目を4項目含む）から構成した。本稿では、「Ⅰ－5. 学校及び栄養教諭としての勤務年数（2020年3月末日現在）」と、「Ⅱ－2. あなたが食に関する指導をする上で、現在、課題と考えていることを3つ、理由を含めて簡潔に記入してください。」及び「Ⅱ－3. 食に関する指導に関わる事項の自己評価」を調査対象とした。「Ⅰ－5.」と「Ⅱ－2.」「Ⅱ－3.」のデータはクロス集計を行い、「Ⅱ－2.」では、課題とその理由の記述内容をカテゴリーに区分して分析した。なお、「Ⅱ－3.」以外のデータは、前報<sup>8)</sup>で報告済みである。

また、統計解析には、Excel 2016 MSO(16.0.48

49.1000)と、エクセル統計(Ver. 3.21)を使用した。なお、有意水準は5%とした。

## 3. 栄養教諭が考える課題の解決策と、「総合的な学習の時間」における食に関する指導の展開例の検討

この検討は、以下の資料を参照して考察した。文部科学省の資料としては、2017年に告示された小・中学校の学習指導要領<sup>1)、2)、27)</sup>と、2019年8月に発刊された「食に関する指導の手引－第2次改訂版－」<sup>3)</sup>、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（中央教育審議会答申）<sup>4)</sup>、「栄養教諭と中核としたこれからの学校の食育～チーム学校で取り組む食育推進のPDCA～」<sup>18)</sup>、である。さらに、農林水産省による「第4次食育推進基本計画」<sup>5)</sup>及びT大学の所在地にある北海道教育委員会の教員育成指標等<sup>19)～21)</sup>を参考にした。

## 4. 倫理的配慮等

本研究は、T大学研究倫理委員会の承認（受付番号2019-23）を受けた。承認時の委員会の指示

表1. 「栄養教諭としての勤務年数の区分」と「食に関する指導に関わる事項の自己評価」の関係 (n=58)

栄養教諭としての勤務年数の区分	調査区分 統計量	a)食の指導の全体計画の作成などの計画作成	b)食の指導時間の確保	c)児童生徒への食の指導	d)児童生徒とのコミュニケーション	e)地産地消の指導	f)個別的な相談指導	g)学校・家庭・地域が連携した食育の推進	h)給食だよりの作成・活用	i)担任など他の教員との連携・協力	j)管理職との連携・協力	k)保護者との連携・協力	l)生産者との連携・協力	m)地域・関係機関（教育委員会等）との連携・協力	全体の平均値
1年未満 (n=4)	平均値	0.00	1.75	2.00	2.75	2.50	0.00	1.75	1.75	2.25	2.75	1.50	2.00	2.00	1.77
	標準偏差	0.00	1.26	0.82	0.50	0.58	0.00	1.50	0.96	0.96	1.26	1.29	0.82	0.82	0.50
2～5年 (n=18)	平均値	1.72	2.22	2.33	3.11	2.33	0.72	1.44	2.67	2.33	2.78	1.67	1.50	2.33	2.09
	標準偏差	1.18	0.81	0.91	0.90	0.97	1.23	1.10	0.59	0.77	0.73	1.33	1.25	1.28	0.49
6～10年 (n=19)	平均値	2.06	2.06	2.78	3.00	2.50	1.28	1.83	2.94	2.67	2.89	2.28	2.22	2.33	2.37
	標準偏差	1.11	0.94	0.65	1.08	1.04	1.53	1.25	0.42	0.84	0.83	1.13	1.22	0.91	0.54
11～15年 (n=17)	平均値	2.18	2.35	2.47	2.88	2.35	1.47	1.82	3.12	2.76	2.82	1.94	1.94	2.12	2.33
	標準偏差	0.88	0.70	0.62	0.86	1.08	1.33	1.19	0.60	0.56	0.53	1.20	1.09	1.11	0.53

※1 「食に関する指導に関わる事項の自己評価」における評価基準は、次の通りである。・・・5：大変容易に対応、

4：容易に対応、3：普通に対応、2：苦勞して対応、1：大変苦勞して対応、0：未実施で今後の課題

表 2. 「食に関する指導に関わる事項の自己評価」の基本統計量 (n=58)

調査区分 統計量	a)食の指導の全体計画の作成などの計画作成	b)食の指導時間の確保	c)児童生徒への食の指導	d)児童生徒とのコミュニケーション	e)地産地消の指導	f)個別的な相談指導	g)学校・家庭・地域が連携した食育の推進	h)給食だよりの作成・活用	i)担任など他の教員との連携・協力	j)管理職との連携・協力	k)保護者との連携・協力	l)生産者との連携・協力	m)地域・関係機関(教育委員会等)との連携・協力	全体の平均値
平均値	1.86	2.21	2.52	3.00	2.41	1.12	1.72	2.84	2.60	2.86	1.97	1.91	2.26	2.25
標準誤差	0.15	0.11	0.10	0.12	0.13	0.18	0.18	0.09	0.11	0.10	0.16	0.15	0.14	0.13
中央値(メジアン)	2	2	3	3	3	0	2	3	3	3	2	2	2.5	2.35
最頻値(モード)	3	2	3	3	3	0	2	3	3	3	3	3	3	2.62
標準偏差	1.15	0.87	0.78	0.92	0.97	1.40	1.18	0.67	0.82	0.78	1.24	1.17	1.07	1.00
分散	1.31	0.76	0.60	0.84	0.95	1.97	1.40	0.45	0.66	0.61	1.54	1.38	1.14	1.05
尖度	-1.01	0.03	1.04	1.78	0.80	-1.36	-1.06	3.19	0.67	3.90	-1.05	-0.97	0.46	0.49
歪度	-0.44	-0.42	-0.75	-0.14	-0.81	0.61	-0.16	-0.54	-0.14	-1.12	-0.67	-0.57	-0.63	-0.45
最小	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0.15
最大	4	4	4	5	4	4	4	5	5	5	4	4	5	4.38
合計	108	128	146	174	140	65	100	165	151	166	114	111	131	130.69
データの個数	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58.00

※1 「食に関する指導に関わる事項の自己評価」における評価基準は、表1と同じである。

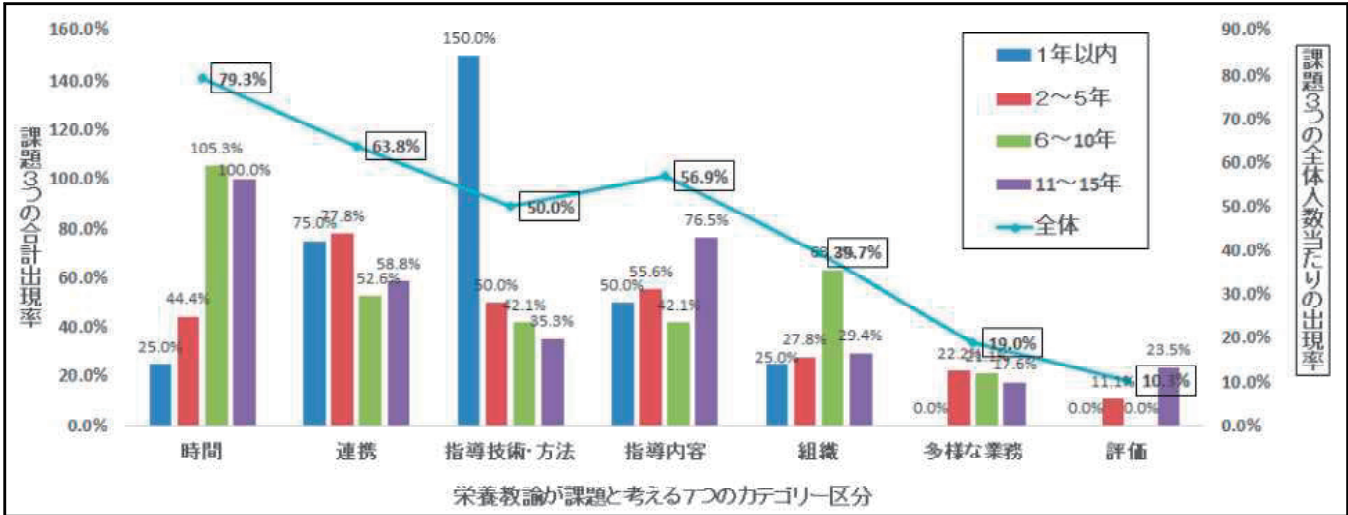


図 1. 「栄養教諭としての勤務年数の区分」と「食に関する指導をする上での課題」の関係(n=58)

※1 図1は、「栄養教諭の食に関する指導の現状と課題の考察ー北海道における実態調査を踏まえてー」(新井 他, 2021)のデータを用いて筆者が作成した (n=58)。

※2 図1で、「課題3つ」とは、食に関する指導上の課題とその理由を3つずつ栄養教諭に記述してもらい、それらを7つのカテゴリーに分けて分析し、得られた課題のことである。

により、調査対象者に文書で、研究協力の任意性等を説明するとともに、研究協力を依頼し、所属長である校長からの承諾書、栄養教諭からの同意書及びアンケート調査票の受理をもって研究参加の同意とみなした。

## V. 実態調査の結果

実態調査の結果について、データ3種を以下に示す。表1には、2019年11・12月に実施した調査

票における「Ⅰ－5. 学校及び栄養教諭としての勤務年数(2020年3月末日現在)の区分」と「Ⅱ－3. 食に関する指導に関わる事項の自己評価」の関係を示した。また、表2には、「Ⅱ－3.」の基本統計量を示した。さらに、図1には、「Ⅱ－2.」の調査で、栄養教諭に記述してもらった3つの課題とその理由について、7つのカテゴリーに区分した結果の出現率と、栄養教諭としての勤務年数の区分との関係を示した。この図は、新井

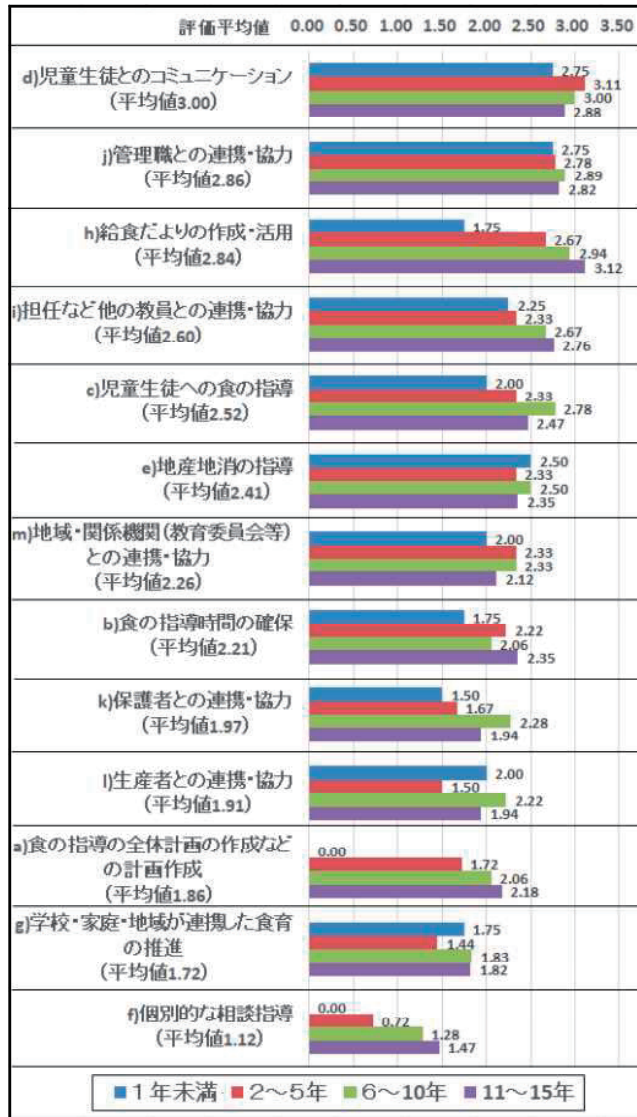


図2. 「栄養教諭としての勤務年数の区分」と「食に関する指導に関わる事項の自己評価」結果の関係 (n=58)

※ 評価基準は表1と同じである。

他(2021)<sup>8)</sup>のデータから筆者が作成した。

なお、「食に関する指導に関わる事項の自己評価」の方法は、該当項目欄に○印を記入する5件法で行ったが、「実施せず今後の課題」の欄もあったことから、その欄に記入した人は、0点として数えて平均値を算出することとした。

## VI. 考察

Vの結果を踏まえ、IIIで設定した3つの研究課

題について考察を述べる。

### 1. 栄養教諭の「食に関する指導に関わる事項の自己評価」と、「多様な業務を背景とした時間不足が主たる要因となって、指導における内容や技術・方法についての課題がある」の関係性はどの程度あるか。

これを考察するために、「食に関する指導に関わる事項の自己評価」結果について、「栄養教諭としての勤務年数の区分」のデータも加えて、評価平均値の高い順に並べた(図2)。また、「食に関する指導に関わる事項の自己評価」結果における、質問項目を評価平均値の高い順に並べて、その評価点の割合を確認した(図3)。

「栄養教諭の「食に関する指導に関わる事項の自己評価」と、前報(2021)<sup>8)</sup>で明らかになった「多様な業務を背景とした時間不足が主たる要因となって、指導における内容や技術・方法についての課題がある」の関係性はどの程度あるか。」であるが、両者の明確な関係性は見出せなかったが、時間不足が要因となって、6割の栄養教諭が「食に関する指導時間の確保」に苦勞していることが分かった。まず、質問項目13項目について、評価平均値の高い順から低い順に並べて、栄養教諭の自己評価の状況を分析した(図2)。評価平均値の高い順で比較すると、第1位は「d) 児童生徒とのコミュニケーション」(評価平均値3.00)、第2位は「j) 管理職との連携・協力」(評価平均値2.86)、第3位は「h) 給食だよりの作成・活用」(評価平均値2.84)であった。逆に評価平均値の低い順で比較すると、最も低い第1位は「f) 個別的な相談指導」(評価平均値1.12)、第2位は「g) 学校・家庭・地域が連携した食育の推進」(評価平均値1.72)、第3位は「a) 食の指導の全体計画の作成などの計画作成」(評価平均値1.86)であった。

次に、「食に関する指導に関わる事項の自己評価」の結果と、「時間」や「指導内容」「指導技術・方法」の関係について、図3の数値から検討した。



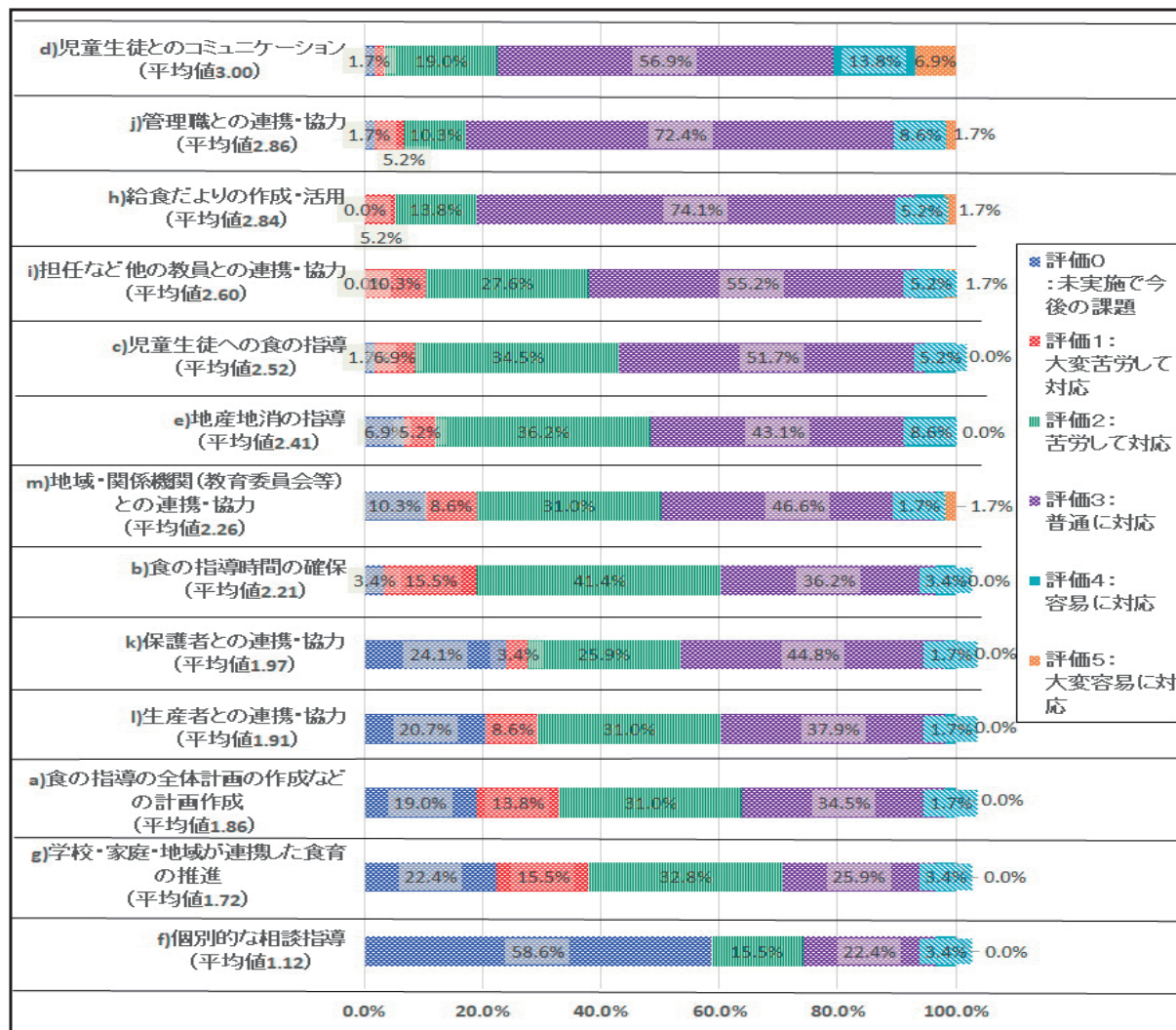


図3. 「食に関する指導に関わる事項の自己評価」の結果 (n=58)

※ 評価基準は表1と同じである。

上位3位までの項目で見ると、「d)」と「h)」が、「時間」や「指導内容」「指導技術・方法」の関係項目と考えた。「d)」では、評価5（大変容易に対応）～評価3（普通に対応）の合計が77.6%、「h)」では、評価5～評価3の合計が81.0%であった。また、上位の第5位は、「c) 児童生徒への食の指導」（評価平均値2.52）であったが、評価5～評価3の合計は、56.9%であり、これらの結果からは、「時間」や「指導内容」「指導技術・方法」が大きな課題となっていることを読み取ることはできなかった。同様に、下位3項目を見ると、低い第1位の「f)」は未実施が58.6%あり、評価5～評価3の

合計が25.9%であった。同様に、第2位の「g)」は、未実施が22.4%あり、評価5～評価3の合計が29.3%であった。第3位の「a)」は、未実施が19.0%あり、評価5～評価3の合計が36.2%であった。これらは、未実施率が大きいことや、評価平均値が低いことから下位となっている。

さらに、評価1「大変苦勞して対応」と、評価2「苦勞して対応」の合計平均値に注目して検討した。これら合計平均値の第1位は、「b) 食の指導時間の確保」（合計平均値56.9%）であった。第2位は「g) 学校・家庭・地域が連携した食育の推進」（合計平均値48.3%）、第3位は「a) 食の指導



の全体計画の作成などの計画作成」(合計平均値44.8%)であった。「b)」では、評価3「普通に対応」～評価5「大変容易に対応」も合計平均値が39.7%であり、6割の栄養教諭が「食の指導時間の確保」に苦勞していることが分かった。また、「g)」では「食育の推進」、「a)」では「食の指導」を含む質問項目であり、5割程度の栄養教諭が食に関する指導に課題意識や苦勞意識を持っていることが窺えた。

なお、「食に関する指導に関わる事項の自己評価」(調査票「Ⅱ-3.」)は、栄養教諭の課題を明確化するというよりは、食に関する指導に関わる日常業務の点検を意図して作成した調査票である。一方、栄養教諭の課題は調査票「Ⅱ-2.」を分析した結果データであり、調査票「Ⅱ-3.」との関係性は、一部に見出すことができたと考えた。

加えて、調査票「Ⅱ-3.」の妥当性を確認するため、13項目の質問項目の評価平均値に注目して、勤務年数毎の評価平均値の多重比較(Tukey-Kramer法)を行った。その結果、勤務年数4区分の有意差( $P<0.05$ )は検出されなかった。

また、これら13項目のデータについて、勤務年数毎に区分して多重比較(Tukey-Kramer法)を行った。有意差があったのは2項目で、「a)食の指導の全体計画の作成などの計画作成」と「h)給食だよりの作成・活用」であった。「h)給食だよりの作成・活用」では、1年未満と他の区分(2～5年、6～10年、11～15年)との間で、p値がそれぞれ、0.0319(\*)、0.0016(\*\*)、 $P<0.001(**)$ と有意差が検出された。同様に「a)食の指導の全体計画の作成などの計画作成」も、1年未満と他の区分(2～5年、6～10年、11～15年)との間でp値がそれぞれ、0.0201(\*)、0.0028(\*\*)、0.0021(\*\*)と有意差が検出された。これらの項目の結果は、栄養教諭の職業人としての資質・能力の向上が、経験年数に反映されたと考えた。

## 2. 多様な業務や時間不足が主たる要因となった、

### 食に関する指導における「指導内容」や「指導技術・方法」の課題についての解決策は何か。

前報(2021)<sup>8)</sup>で明らかになった、この課題の解決策について考察するため、次の1)、2)の2つの視点から考察した。

#### 1) 栄養教諭の職務と役割

これを考察するため、前述の文部科学省の資料<sup>3)</sup>、<sup>18)</sup>により、栄養教諭の職務と役割を整理した。表3にあるように、栄養教諭の職務は、児童に対する指導と学校給食の管理に大別され、業務が多様であることが明確である。さらに、この職務遂行のため、教職員、家庭や地域との連携・調整が欠かせないとされ、その役割は、連絡・調整の「要として」の期待から、多岐にわたっている。こうした多様な業務遂行こそ、栄養教諭にとって重要な責務であり、理想の栄養教諭像となることが分かった。

次に、業務の多様性が理想の栄養教諭像につながることを確認するため、北海道教育委員会が公表している「教員育成指標」<sup>19)</sup>における「求める

表3 栄養教諭の職務と役割

1 栄養教諭の職務		
(1)食に関する指導	一体として推進	(2)学校給食の管理
①給食の時間の指導		①栄養管理 (献立作成)
②教科等の指導		②衛生管理
③個別的な相談指導進		
教職員、家庭や地域との連携・調整		
2 栄養教諭の役割		
■教職員の連携・調整の要としての役割		
・管理職や養護教諭、学級担任等との連絡・調整に基づく各種計画案の作成		
・管理職や養護教諭、学級担任、給食調理員等と役割分担を明確にした計画推進		
■家庭や地域との連携・調整の要としての役割		
・家庭における食生活や生活習慣等の実態把握		
・家庭と連携した取組を推進するための企画・提案		
・地域の食育の取組の情報収集		
・地域の関係機関・団体と連携した取組を推進するための企画及び連絡調整		

※ 表3は、「食に関する指導の手引―第二次改訂版―」(文部科学省、2019)<sup>3)</sup>と、「栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育～チーム学校で取り組む食育推進のPDCA～」(文部科学省、2017)<sup>18)</sup>のデータを用いて筆者が作成した。

表4 北海道の教員育成指標における「求める教員像」にある「キーとなる資質能力」の比較

■小学校教諭独自の「キーとなる資質能力」
◎「実践的指導力」 ○授業力 ○生徒指導・進路指導力 ○学級経営力
■栄養教諭独自の「キーとなる資質能力」
◎「栄養管理・衛生管理」 ○栄養管理 ○衛生管理 ○栄養相談 ○調査研究等
◎「食に関する実践的指導力」 ○立案と推進 ○指導内容 ○指導技術と指導形態

※ 表4は、「北海道における教員育成指標」（北海道教育委員会、2017）<sup>19)</sup> のデータを用いて、筆者が作成した。

教師像」の指標の一つである「キーとなる資質能力」を確認した（表4）。「キーとなる資質能力」には、小学校教諭関連のものとして4項目、栄養教諭関連のものとして5項目設定されているが、そのうち、両者に共通のものは、教員の素養、専門性、連携・協働の3項目である。小学校教諭と栄養教諭とで異なるのは、実践的指導力をめぐる資質能力である（表4）。小学校教諭の「実践的指導力」の項目には、「授業力」、「生徒指導・進路指導力」、「学級経営力」の3点が示されており、基本的には児童に直接向き合う際の力量としての資質・能力を示している。これに対して、栄養教諭には、「栄養管理・衛生管理」と「食に関する実践的指導力」の2項目にわたって、合わせて7点の資質・能力が示されており、小学校教諭よりも業務が多様であることが明示されていた。

## 2) 多様な業務や時間不足が主たる要因となった、食に関する指導における「指導内容」や「指導技術・方法」の課題についての解決策は何か。

このことについて、実践力向上に関する課題解決の方策として、次の2つの視点から考察した。

### (1) 「指導内容」や「指導技術・方法」についての実践力向上に関する課題の主たる要因である

## 多様性・多忙化の解消の方向性

まず、多様性については、栄養教諭の職務上、今後ますます重要であることが分かった。2021年度から2025年度までが計画期間である「第4次食育推進基本計画」<sup>5)</sup>においては、栄養教諭に期待される役割がさらに多様化するものとして記載されており、より一層多角的な「連携・協働」が求められている。また、「学校においては、学童期、思春期における食育の重要性を踏まえ、給食の時間はもとより、各教科や総合的な学習の時間等、農林漁業体験の機会の提供等を通じて、積極的に食育の推進に努め、子供たちの食に対する意識の変容の方向性や食に対する学びの深化の程度等を、食を営む力として評価していく」<sup>22)</sup>ことも示された。そして、「栄養教諭・管理栄養士等を中核として、保護者や地域の多様な関係者との連携・協働の下で、体系的・継続的に食育を推進していくことが一層重要となっている」<sup>23)</sup>とし、「新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う食生活の変化など子供たちの食をめぐる状況が変化する中で、バランスのとれた食生活を実践する力を育むため、健康教育の基盤となる食育の推進を担う栄養教諭の役割はますます重要」<sup>24)</sup>と記された。これらのことから、孤立しがちな栄養教諭の業務が、多様な中でも合理的・計画的に進むよう、校長をはじめとする全教職員の積極的な連携・協働を図り、「栄養教諭を中核とする、学校、家庭、PTA、関係団体等が連携・協働した取組」<sup>18)</sup>の推進が可能になるよう「チーム学校」体制を整備することが必要であると考えた。

一方、多忙化（時間不足）については、現在、文部科学省を中心として「長時間勤務」の解消について検討されており、その解消について今後に期待したい。文部科学省では、中央教育審議会において、「長時間勤務による疲弊」として答申<sup>4)、25)</sup>が出されており、現在、「チーム学校」や「働き方改革」等の施策の推進により、都道府県などの教育委員会と学校が連携しながら、その解決に向か

表5 北海道の栄養教諭対象の研修における「食に関する指導における「指導内容」や「指導技術・方法」に関連する研修」の状況

研修段階	研修項目数	「食に関する指導における「指導内容」や「指導技術・方法」に関連する研修」内容	同左の全体割合
		研修項目数	
初任段階栄養教諭等研修 採用1年目	16	「食に関する指導の全体計画」など 6項目	37.5%
初任段階栄養教諭等研修 採用3年目	10	「ICTを活用した食育の推進」など 3項目	30.0%
初任段階栄養教諭等研修 採用4年目	3	「家庭・地域と連携した食育」など 2項目	66.7%
初任段階栄養教諭等研修 採用5年目	9	「学習指導要領に対応した授業改善、研究協議」など 3項目	33.3%
中堅栄養教諭等資質向上研修	12	「教科における食に関する指導」など 5項目	41.7%
合計	50	19項目	38.0%

※ 表5は、「令和3年度(2021年度)北海道教職員研修計画」(北海道教育委員会、2021)<sup>20)</sup>のデータを用いて、筆者が作成した。

って着実に進んでいる現状にある。このことから、今後、教育委員会と学校が連携を深め、教員の「長時間勤務」の解消が進むことを期待している。

## (2) 「指導内容」や「指導技術・方法」についての実践力を向上させるための「研修」の充実

「研修」の充実については、T大学の所在地にある北海道教育委員会が行う「初任段階(採用教員の1年目から5年間)の研修」と「在職期間が10年に達した栄養教諭に対する2回にわたる研修」に注目して検証した。これらの研修では、延べ6年間で8期15日間(オンデマンド等を含む。)の研修となっている。内容は、前述した「求める教員像」の「キーとなる資質能力」の各項目に対応した内容で構成している<sup>20)</sup>。それらの研修において、前報(2021)<sup>8)</sup>で課題として明確化した「食に関する指導における「指導内容」や「指導技術・方法」に関連する研修項目は、全研修項目の38.0%であった(表5)。この割合についての大小は論じないが、このような研修が最大の効果を発揮するためには、研修をきっかけとして、勤務校における食に関する指導に関する課題を明確化すること

と、日々の実践を通して、自ら主体的に、教員としての資質・能力を向上させていこうとする意欲と努力が重要であり、このためには、お互いに励まし合う同僚や仲間の存在が重要と考えた。

しかし、栄養教諭は、1つの学校に1人配置であつたり、1つの町村の複数の学校を1人で担ったりするなど、同僚が少ない現状にある。例えば、2020年度において、北海道には、公立の小学校は992校、中学校は566校、義務教育学校は11校、合わせて1,569校ある<sup>21)</sup>中、栄養教諭は477人の配置となっており<sup>26)</sup>、北海道の栄養教諭1人あたりの平均担当学校数は、約3.3校であつた。こうした環境にあつては、北海道教育委員会の研修をきっかけとして研究と修養に励もうとしても、一人での切磋琢磨が求められることが多い。学校には、授業技術等での相談が可能な同僚教員は多数いるにせよ、専門内容も合わせて相談できる同僚が少なく、互いに励まし合いながらなどの切磋琢磨が極めて難しい状況にあることは容易に想像できる。

そうした中、2021年度で栄養教諭制度開始16年目となることから、「ベテラン段階」の栄養教諭が登場し、相互に切磋琢磨できる環境が充実することが期待できると考えた。北海道教育委員会は、10年に達した栄養教諭等の研修以後の経験者の項目として「ベテラン段階」を設定している。この「ベテラン段階」の栄養教諭が各種研修において、これまでの研修と実践の成果をもとにリーダーシップを発揮することにより、全道的な栄養教諭の研修の深まりと、相互に切磋琢磨できる環境が充実することが期待できると考えた。

さらに、現職教員の「研修」の充実にあたって、「養成」に関わる大学と、現職教員の「研修」に関わる国の研修機関や都道府県の教育研究所などの関係機関、及び教育委員会並びに各学校が連携して行う研修が重要になると考えた。加えて、現在、教員免許更新制については見直しの議論が進められている中なので言及は避けるが、栄養教諭養成大学において、食に関する指導上の相談が可



能となるような卒業生と大学とのネットワークの構築や体制づくりも重要であると考えた。

なお、これら以外の視点としては、私的な研究会・団体の研修の充実や、大学の教職課程における授業内容等の充実も重要である。大学の教職課程に関わることは、考察3で述べることとする。

### 3. 栄養教諭に必要な資質・能力を高める教職課程の「総合的な学習の時間」指導論における授業改善の視点は何か。

授業改善の必要性については、前々報（2020）<sup>7)</sup> 年）から課題となっており、これを考察するため、次の1)～3)の3つの視点から考察した。

#### 1) 栄養教諭を目指す学生に求められる教科等の指導における資質・能力と「総合的な学習の時間」

まず、「総合的な学習の時間」の目標とその達成

のために取り組む授業を推進するための学習指導力について整理し、栄養教諭を目指す学生に求められる教科等の指導における資質・能力について考察した。図4に示したように、2017年改訂の学習指導要領<sup>27)</sup>において、「総合的な学習の時間」の目標は、全体的な目標と、(1)～(3)の具体的な方向性を示す目標で構成されている。その3つを図4では「目標実現のために必要な授業」として整理した。また、この3つの方向性で授業を行うために、どのような学習指導力が必要かについては、2017年の改訂小学習指導要領の「第7章 総合的な学習の時間の学習指導」<sup>28)</sup>において記載されている。ここでは、その中から、学生が身に付けるべき学習指導力として、図4において「総合的な学習の時間」に必要な指導力」として①～④の4点で整理した。

次に、栄養教諭に求められる指導力について考

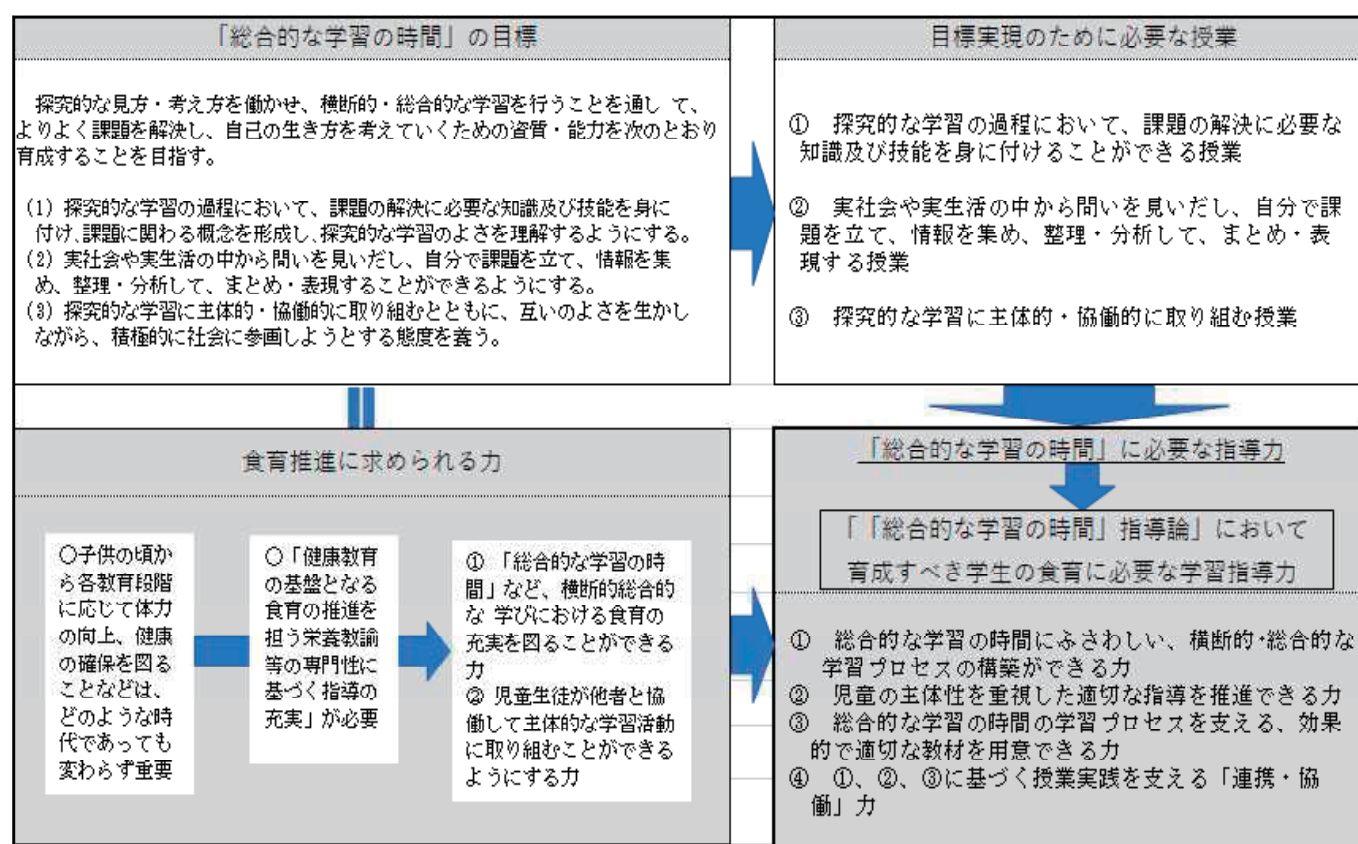


図4. 「総合的な学習の時間」指導論」において育成すべき学生の食育に必要な学習指導力

※ 図4は、「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編」（文部科学省、2018）<sup>27)</sup>と、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して」（中央教育審議会、2021）<sup>4)</sup>から筆者が作成した。



察した。2021年の中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指して」<sup>4)</sup>においては、生涯を通じて心身ともに健康な生活を送るための資質・能力を育成するための方策が述べられている。図4においては、それを踏まえて、食育の中核をなす栄養教諭に求められる指導力を、「食育推進に求められる力」の中で、①、②の2つに整理した。この2つは、2017年改訂小学習指導要領第7章<sup>28)</sup>の内容と同一であり、前述した「総合的な学習の時間」に必要な指導力の4つに収斂されていると考えた。こうしたことから、栄養教諭養成大学における「総合的な学習の時間」指導論において育成すべき学生の食育に必要な学習指導力は、図4に示した①～④の4点になると考えた。

## 2) 栄養教諭に必要な資質・能力を高める教職課程の「総合的な学習の時間」指導論における授業改善の視点

このことについては、図4に示した4つの力を育成するために、次の3つの改善の視点を示した。その1点目は、学生が「総合的な学習の時間」の目標を明確に理解することである。このことは、「総合的な学習の時間」に必要な指導力が、「総合的な学習の時間」そのものの目標実現のための手段であることを学生に理解させることが重要であると考えたことによる。

2点目は、学生が、「総合的な学習の時間」の目標の実現に向かって、現場で必要とされる指導力を理解し、実践力を身に付けることである。このことは、求められている授業の姿とそのための指導力を理解させ、実際に体験させることが必要だと考えたことによる。この視点は、「総合的な学習の時間」指導論の中核となることから、実践力（模擬体験等）の育成に関する指導展開例を、3)で示すこととした。

3点目は、学習指導要領のねらいを達成するために努力しようとする意欲と教師としての使命感を醸成することである。このことは、学生が上記

表6. 「総合的な学習の時間」指導論における、  
単元計画の作成とその模擬授業体験による指導力向上のための授業展開例

<p><b>(1)「食育をテーマにした単元計画」立案 (10～15単位時間の計画)</b></p> <p>■計画に加える要素</p> <p>ア 食育に関わる課題を追究する計画を立てる。</p> <p>イ 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現する学習活動を計画する。</p> <p>ウ 児童間での協働的取組を取り入れる。</p> <p>エ 地域や関係者との連携・協働する計画を組み込む。</p>
<p><b>(2)単元計画の中の、2時間分の具体的な「学習指導案」作成</b></p> <p>■指導案に加える要素</p> <p>ア アクティブ・ラーニングの手法を組み込む。</p> <p>イ 自分で食に関する課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現する学習活動のいずれかを組み込む。</p> <p>ウ グループワークやペアワーク、あるいは調理実習等、児童間での協働的取組を取り入れる。</p> <p>エ 複数の教員と連携・協働する場面を設ける。</p>
<p><b>(3)作成した学習指導案に基づく模擬授業実施</b></p>

2点を理解し、管理栄養士としての専門教育を通して、栄養教諭としての専門性を向上させることと表裏一体となる。そして、生涯にわたって、食育に関わる知識・技能を最新のものに更新し続けていく意欲向上も必要である。その上で、教師としての使命感の醸成は、大学教職課程の存在意義でもあると考えた。

## 3) 栄養教諭の「総合的な学習の時間」指導論における授業改善の指導展開例

2)の整理を踏まえて、「総合的な学習の時間」指導論の授業改善の具体例を示した(表6)。その内容は、単元計画の作成と、模擬授業の実施である。従来、大学の「特別活動論」などにおいては、1単位時間の食に関する指導の模擬授業を実施するなどしてきた。例えば、現場では、小学校における学級活動において「食に関する指導」を行う場合、通常、学級担任との連携のもと、学級経営の一貫として概ね1～3単位時間の授業ごとに完結するように組み込まれている。こうした授業は、特別活動の趣旨に照らして、大いに効果の

ある指導であり、大学での模擬授業も、このことを反映して実施してきた現状がある。

しかし、このような学習指導案に基づく模擬授業では、「総合的な学習の時間」の全体像の理解が難しい。2017年改訂学習指導要領<sup>27)</sup>には、「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行う」ための「目標を実現するにふさわしい探究課題」が例示されている。その課題追究をするためには、一定時間をまとめた単元計画を立てる必要がある。さらに、その計画の中に、「実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現する」学習活動が必要である。その際、児童間での協働的な取組を行う計画を含めることが大切である。

したがって、「総合的な学習の時間」指導論においては、上述した模擬授業の進め方と異なり、一定程度の授業時間をまとめて計画する「単元計画」(10～15単位時間)の立案という手法を考えた。この時間設定は、「食に関する指導の手引」<sup>3)</sup>において、「総合的な学習の時間」の実践としての「単元計画」例が25～70単位時間で紹介されており、指導の全体像を把握するためには効果のある例示となっている。しかし、実際に学校において取り入れようとする、実施時間数が多く、現実的ではないと考えた。また、前々報<sup>7)</sup>の調査では、食に関する指導における「総合的な学習の時間」の実施時間数としては、2～15単位時間が中心になっていることも踏まえ、より現実的な時間数を設定した。こうした「単元計画」の作成などの体験によって、図4で示した指導力の基礎を育成することが可能になると考えた。

また、この授業展開例は、コアカリキュラムで規定された「総合的な学習の時間」の理論等の理解部分の5回を除く3回分を想定して提案したものである。なお、「単元計画」と「学習指導案」の作成については、講義で理論部分を説明した後の課題学習として扱うこととした。

## VII. まとめ

本稿では、栄養教諭が考えている食に関する指導上の課題について、3つの研究課題を設定して検証した。研究対象は、2019年度に北海道の小・中学校に勤務する栄養教諭394名であり、郵送法により質問紙調査に回答した58名が調査対象となった(回答率は14.7%)。

研究方法は、アンケート調査の結果である栄養教諭としての勤務年数、食に関する指導に関わる事項の自己評価結果、食に関する指導をする上の課題のデータをクロス集計や多重比較で統計解析した。また、栄養教諭が考える課題の解決策と「総合的な学習の時間」における食に関する指導の展開例の検討は、文部科学省、農林水産省、北海道教育委員会の資料を活用して考察した。

1つ目の課題である「栄養教諭の「食に関する指導に関わる事項の自己評価」と、「多様な業務を背景とした時間不足が主たる要因となって、指導における内容や技術・方法についての課題がある」の関係性はどの程度あるか。」であるが、両者の明確な関係性は見出せなかったが、時間不足が要因となって、6割の栄養教諭が「食に関する指導時間の確保」に苦労していることが分かった。一方、「食に関する指導に関わる事項の自己評価」結果の多重比較(Tukey-Kramer法)では、調査項目13項目中2項目で、勤務年数1年未満と他の区分(2～5年、6～10年、11～15年)との間に有意差( $P < 0.05$ 以下)が検出された。この2項目である「食の指導の全体計画の作成などの計画作成」と「給食だよりの作成・活用」の結果は、栄養教諭の職業人としての資質・能力の向上が、経験年数に反映されたと考えた。

2つ目の課題である「多様な業務や時間不足が主たる要因となった、食に関する指導における「指導内容」や「指導技術・方法」の課題についての解決策は何か」であるが、まず、多様性と多忙化について考察した。多様性については、栄養教諭の職務上、今後ますます重要であることが分かっ

た。また、多忙化（時間不足）については、現在、文部科学省を中心として「長時間勤務」の解消について検討されており、その解消について今後に期待したいと考えた。そして、「指導内容」や「指導技術・方法」についての実践力を向上させるための「研修」の充実については、北海道教育委員会の資料を中心に考察した。

3つ目の課題である「栄養教諭に必要な資質・能力を高める教職課程の「総合的な学習の時間」指導論」における授業改善の視点は何か」であるが、栄養教諭の課題解決の視点を含めた改善例を提案した。

## VIII. 今後の課題

今後の課題は2点ある。1点目の課題は、令和3年答申<sup>4)</sup>で示された、ポストコロナ時代を踏まえ、かつ、Society5.0社会の到来を想定して取り組まれる方策に対する学校への影響の把握である。令和3年答申<sup>4)</sup>の中心は、ICTも活用した、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実に向けた方策であり、その実現状況を理解した上での教職課程の運営は必須になると予想した。そのためには、今後も栄養教諭に対して、継続的に調査を行い、検討、分析することが必要であると考えている。

2点目は、教職課程における教育内容の充実と質の向上である。今回明らかになった、栄養教諭に求められる多様性への対応や、連携・協働への行動力や、チーム学校における専門職としてのリーダーシップの発揮など、実践的指導力の高い栄養教諭を養成する必要がある。そのための授業改善の方策や育成方針の見直しをすることは極めて重要かつ急務であると考えている。

## 謝辞

本研究に参加を承諾し、アンケートに回答していただいた北海道の58名の栄養教諭の皆様には厚くお礼申し上げます。

## 引用文献

- 1) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編，東洋館出版社，2018.
- 2) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編，東山書房，2018.
- 3) 文部科学省：食に関する指導の手引－第二次改訂版－，建学社，2019.
- 4) 中央教育審議会：「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申），31，2021.  
[https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf)  
(2021年5月18日閲覧)
- 5) 農林水産省：第4次食育推進基本計画，農林水産省，2021.  
[https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/hyोजi/210331\\_35.html](https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/hyोजi/210331_35.html) (2021年6月10日閲覧)
- 6) 農林水産省：令和2年度 食育白書（令和3年5月28日公表），農林水産省，2021.  
[https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/wpaper/r2\\_wpaper.html](https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/wpaper/r2_wpaper.html) (2021年6月10日閲覧)
- 7) 新井英志 村田尋如：「総合的な学習の時間」における栄養教諭の食に関する指導の現状と課題－北海道における実態調査を踏まえて－，天使大学紀要21(1)．1-15，2020.
- 8) 新井英志 他：栄養教諭の食に関する指導の現状と課題の考察－北海道における実態調査を踏まえて－，天使大学紀要21(2)．1-14，2021.
- 9) 坂本達昭 他：担任教諭が主体となる社会科および総合的な学習の時間における食に関する指導の実施可能性と学習成果の検討：給食を残さず食べる行動形成をめざして，栄養学雑誌 71(2)，76-85，2013.
- 10) 井元りえ：国連の持続可能な開発目標(SDGs)をテーマにした授業－総合的な学習の時間に

- における家庭科教諭と栄養教諭による協同一，  
女子栄養大学教職課程センター年報(2)，5-12，  
2017.
- 11) 浅沼美由希 他：栄養教諭を中心とした多教科における「秋サケ丸ごと探検ノート」活用の可能性：総合的な学習の時間を事例に，岩手大学大学院教育学研究科研究年報(5)，33-43，2021.
- 12) 中尾愛 他：広島県の小学校における食に関する指導の実態：家庭科指導に着目して，一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集 61(0)，286-286，2009.
- 13) 篠原久枝：宮崎県内の小学校・中学校における食育の実態調査：五感を生かした味覚教育を中心に，宮崎大学教育文化学部紀要．芸術・保健体育・家政・技術(27)，1-15，2012.
- 14) 丹野久美子：栄養教諭による個別指導の現状と課題，宮城学院女子大学 生活環境科学研究所研究報告(47)，29-35，2015.
- 15) 磯部由香 他：小学校における給食指導の現状と課題，三重大学教育学部研究紀要．自然科学・人文科学・社会科学・教育科学・教育実践 (68)，143-148，2017.
- 16) 向坂幸雄 他：保・小・中家庭における伝統的食文化に対する意識調査から考える領域「環境」での食育指導，中村学園大学薬膳科学研究所研究紀要(11)，39-44，2019.
- 17) 北海道教育評論社編：北海道教育関係職員録 2019年度版，2019.
- 18) 文部科学省：栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育～チーム学校で取り組む食育推進のPDCA～，2017.  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/syokuiku/1385699.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/1385699.htm) (2017年5月20日閲覧)
- 19) 北海道教育委員会：北海道における教員育成指標，2017.
- 20) 北海道教育委員会：令和3年度(2021年度)北海道教職員研修計画，37-38，2021.  
<http://www.dokyoii.pref.hokkaido.lg.jp/hk/kks/kennsyu/page.htm>  
(2021年6月15日閲覧)
- 21) 北海道教育委員会：道内の学校数（令和2年4月1日現在），2021.  
<http://www.dokyoii.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ksk/chosa/settihai/gsu2020top.htm>  
(2021年6月15日閲覧)
- 22) 農林水産省：第4次食育推進基本計画，農林水産省，18，2021.  
[https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/hyोजi/210331\\_35.html](https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/hyोजi/210331_35.html) (2021年6月10日閲覧)
- 23) 農林水産省：第4次食育推進基本計画，農林水産省，18-19，2021.  
[https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/hyोजi/210331\\_35.html](https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/hyोजi/210331_35.html) (2021年6月10日閲覧)
- 24) 農林水産省：第4次食育推進基本計画，農林水産省，19，2021.  
[https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/hyोजi/210331\\_35.html](https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/hyोजi/210331_35.html) (2021年6月10日閲覧)
- 25) 中央教育審議会：新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について（答申），2019.
- 26) 文部科学省：栄養教諭の配置状況（令和2年5月1日現在），2021.  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/syokuiku/08040314.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/08040314.htm) (2021年6月15日閲覧)
- 27) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編，東洋館出版社，2018.
- 28) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編，東洋館出版社，108-123，2018.